

宮田直彦のエリオット波動レポート

マーケット見通し(短期アップデート) 10 月 2 日 9:34AM 更新

[日経平均・TOPIX]

【当面の想定レンジ】(日経平均) 49,500～70,000 円
(TOPIX) 3400～4200

[NY ダウ・S&P500]

【当面の想定レンジ】(NY ダウ) 45,000～54,000 ドル
(S&P500) 6300～7800

[ナスダック 100]

【当面の想定レンジ】(ナスダック 100) 23,500～30,800
(ナスダック総合) 20,700～27,300

[米ドル/円]

【当面の想定レンジ】 140.000～161.000 円

[ドルインデックス(ドル指数)]

【当面の想定レンジ】 98.000～103.650

エリオット波動とは

株式・為替動向を予想する心強いテクニカル手法

米国人ラルフ・ネルソン・エリオットが提唱した、今後の株式や為替など市場価格の動向を予想する手法です。相場は 5 つの上昇波と 3 つの下降波（合計 8 つの波）で一つの周期を作るパターンに従って展開するとされます。

このパターンは集団心理によるもので、数分から数十年といった様々な時間軸において観察されます。

フィボナッチ数列、黄金分割比率をチャート分析に初めて導入したのもエリオットです。

日経平均・TOPIX



【週足 エリオット波動分析】

72,831 円(6/22 高値)以来、プライマリー第④波の弱気相場が進行中とみています。

3 月末(50,558 円)から始まった現行週次サイクルは、弱気相場に特有の「レフト・トランスレーション(右肩下がり)」になる公算が大きいでしょう(上昇期間よりも下げ期間が長くなります)。

現行サイクルの上昇期間はフィボナッチ 13 週(両端入れ)の長さでした。サイクル全体が 37 週～53 週(※1)ということから、6 月 22 日(サイクルトップ)からの通算下げ期間は、24 週～40 週(5 カ月～8 カ月)と推定されます。

換言すると、日経平均は今年 11 月～来年 3 月まで下値模索の展開が予想されます。

「レフト・トランスレーション」のパターンでは、サイクル終点の安値がサイクル始点安値を通常は下回ります。つまり、少なくとも 50,558 円を下回るまで(※2)現行週次サイクルは終わらないでしょう。

(※1)週次サイクル期間(2020 年以降の補正後)は 45 週±8 週(37 週～53 週)。

(※2)サイクルの高値から安値まで、下げ率は 10%～26%(平均 17%)。今サイクル安値が 50,558 円未満であると仮定すると、現行サイクルの下げ率は 30%を超えることになる。

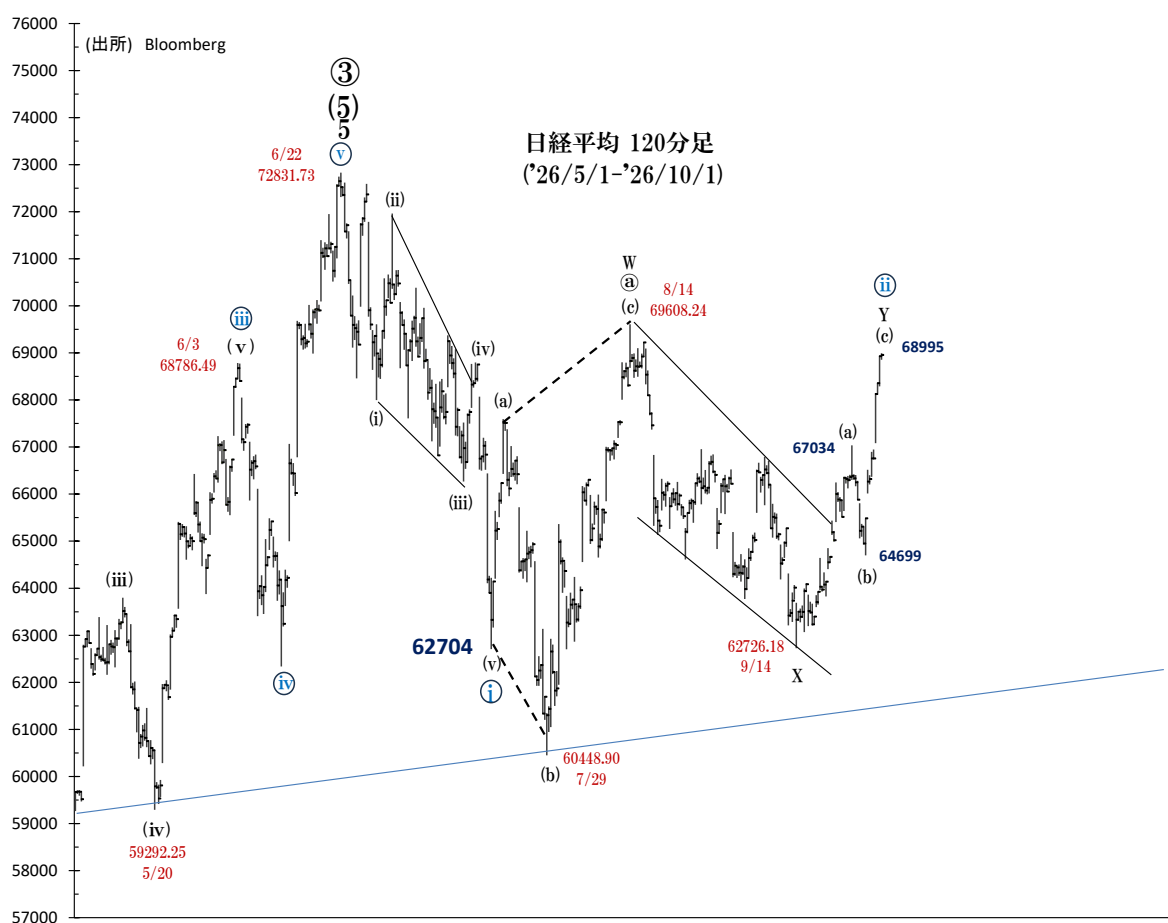


日経平均のプライマリー③波のピークは6月22日ですが、そこからTOPIXはおよそ2カ月遅れ、8月14日に4220でピークを付けました(未確認による天井打ち)。

8月天井からプライマリー④波による調整が始まったとみられます。その調整規模は、プライマリー第②波(2018年1月～20年3月)の下げ率(37.2%)と同等か、それ以上の大きさになると思われます。

10月1日は一時4140まで上昇しました。仮に8月高値から「One-two, one-two」で下げているなら、目的的にもマル iii 波における第 iii 波(サード・オブ・サード)の強い下げがスタートするでしょう。それは3880(8/3 安値)を早々に打診することでしょう。

反面 4153(9/28 高値)を抜くと、短期的な波動パターン解釈を見直す必要があります。



[日経平均・120分足]

AI・半導体関連株への集中的な買いにより、日経平均は9月29日安値～10月1日高値まで、僅か2日半で4200円超の上昇となりました。想定と異なる動きであり、短期的な波動カウントを見直します。

62,704円(7/17 安値)からのマル ii 波は「ダブル・スリー(W-X-Y)」パターンを描き、今はその完成を見極める局面です。

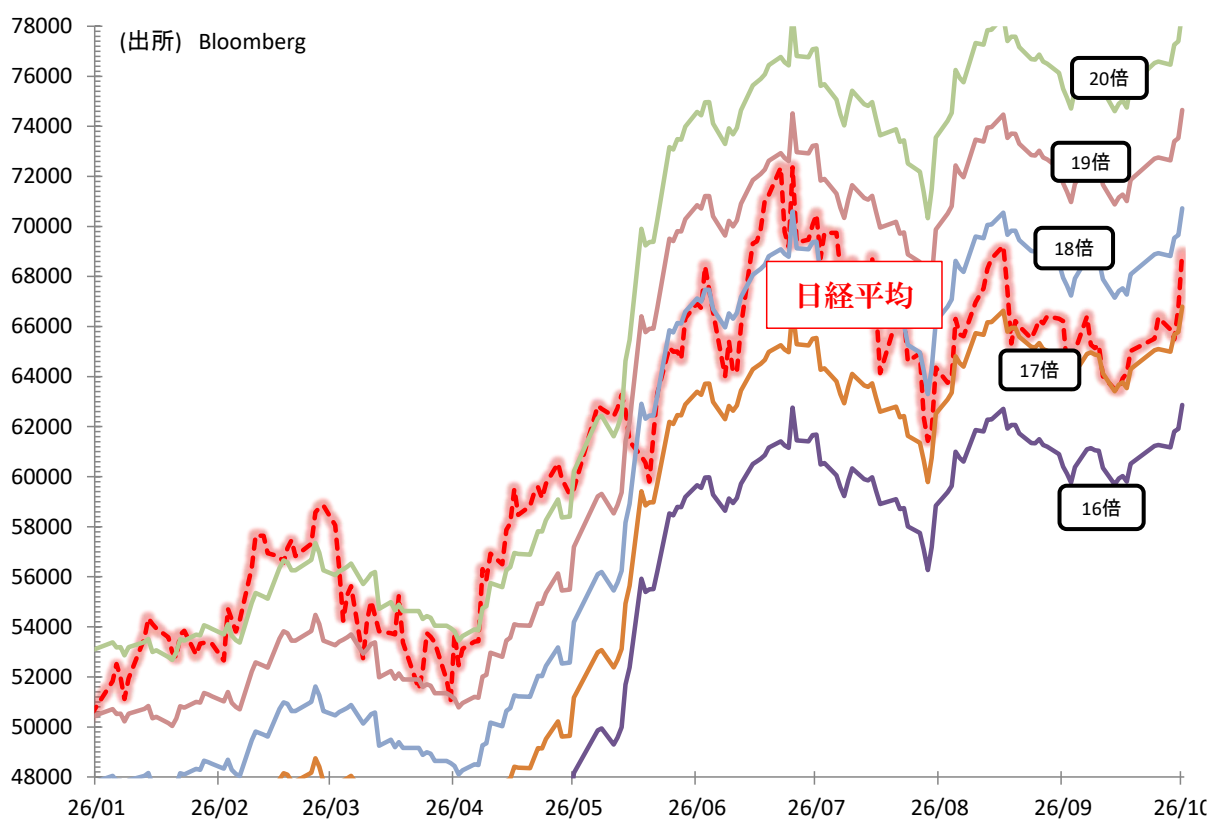
62,726円(9/14 安値)からは上昇 Y 波に相当し、Y 波自体はジグザグ(a)-(b)-(c)です。

10月1日高値は68,995円ですが、それは(a)波と(c)波が等しく上げる水準[69,007円]に近いものです。さらにマル i 波の下げに対する61.8%戻り[68,963円]に達しています。

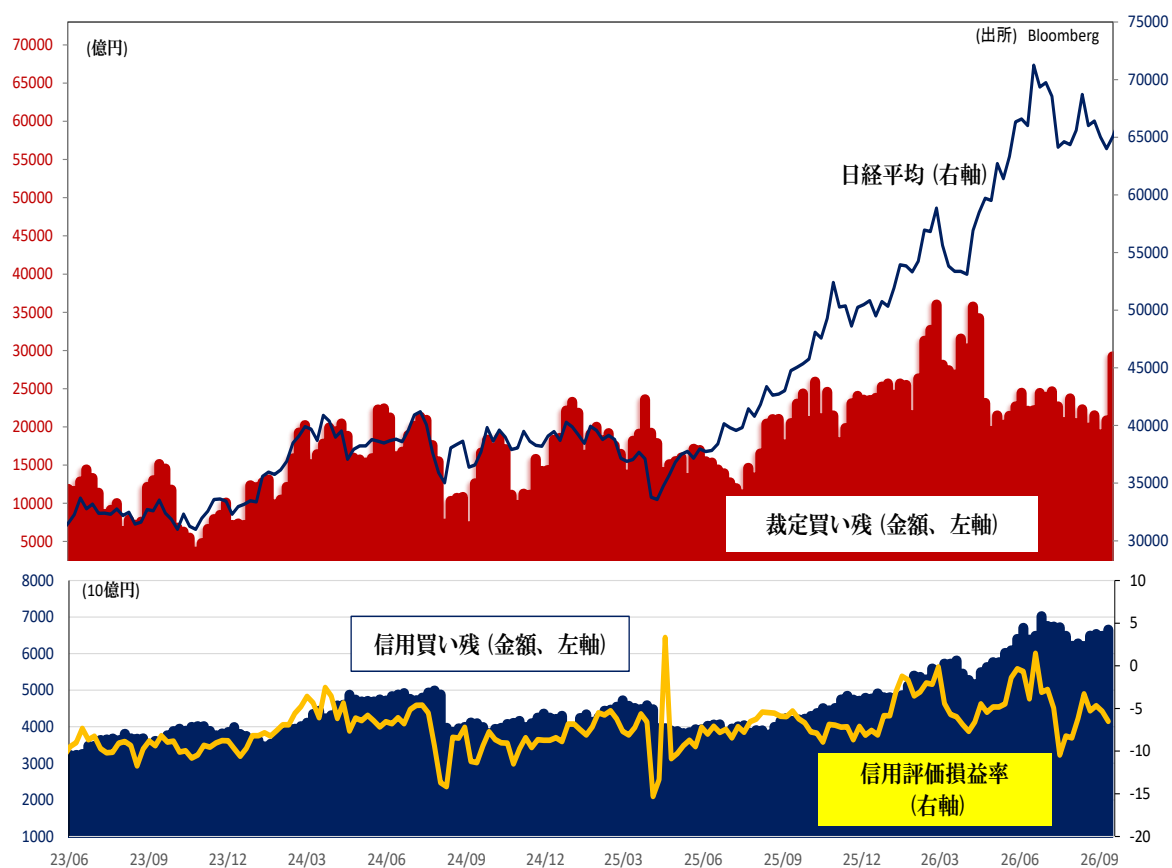
こうみると目先でマル iii 波スタートとなっておかしくありません。ひとたびマル iii 波の下げとなれば、それは早々に60,448円を割り込むでしょう。

[予想 PER 別の日経平均水準]

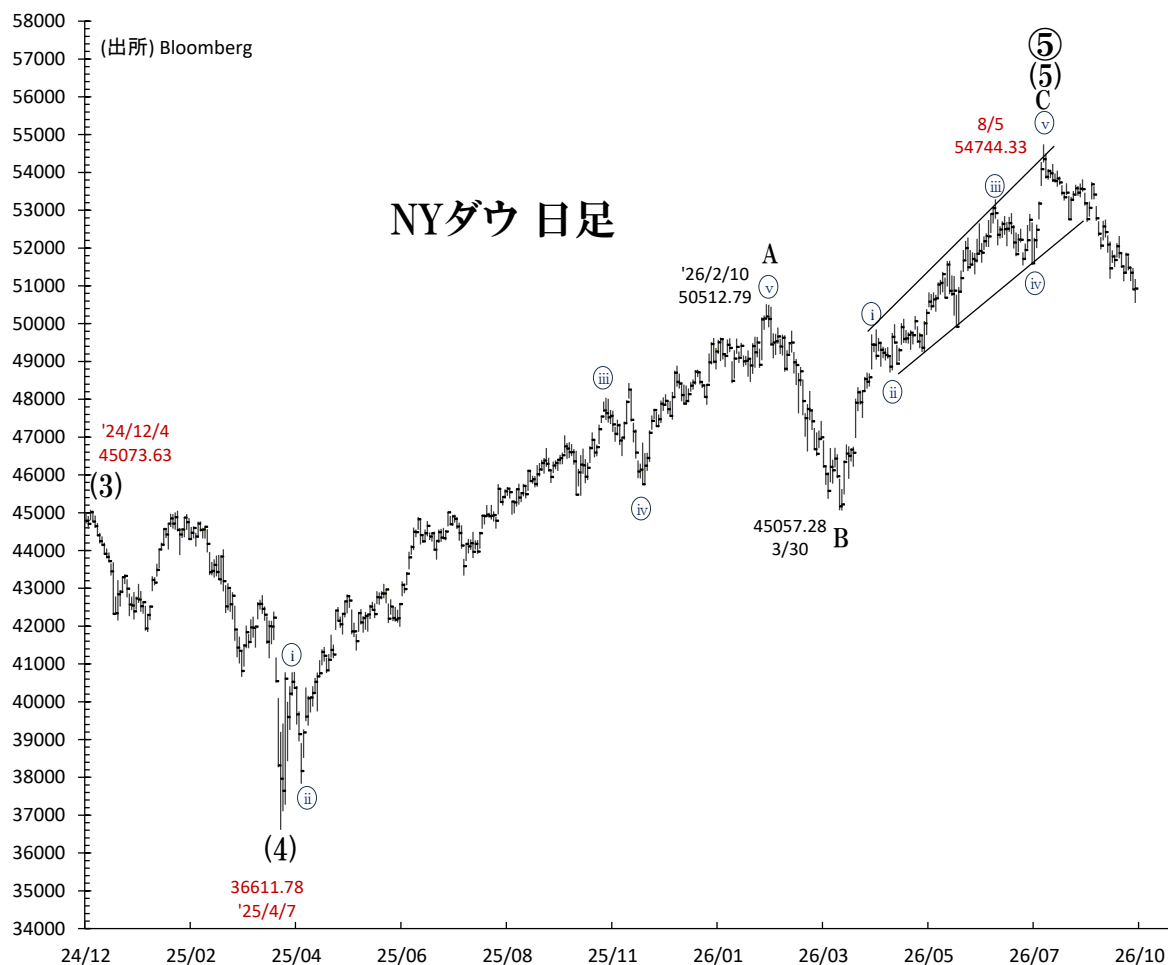
10月1日の日経平均予想 PER は17.55倍、予想 EPS は3929円(過去最高)。



[裁定買い残と信用買い残] (9月18日時点)



NY ダウ・S&P500



【NY ダウ 30 日足 エリオット波動分析】

半導体株とAI関連株への集中投資により、ナスダック総合指数とナスダック100は9月22日に最高値を更新しました。しかしハイテク株の上昇にNYダウ30はまったく追随できていませんし、ダウ運輸株は足元で4カ月ぶり安値を付けています。

NYダウは、4月下旬からの「メガホントップ」天井パターンから下放れが続いています。

10月1日は一時50,546ドルまで下げました。200日MA(50,260ドル)、3月からの上昇の半値押し[49,900ドル]など、重要なサポートレベルに近づいています。

49,900ドルを割り込むと、3月からの上昇に対する61.8%押し[48,757ドル]を目指すことが想定されますが、より大きな弱気の可能性があります。



【S&P500 日足 エリオット波動分析】

10月1日、長期金利(10年)は一時約24年ぶりの水準に上昇し、実質金利は3%に接近しています。そのような環境でも株価は最高値付近で推移し、VIX指数(恐怖指数)は依然、異例の低水準にあります。

多くの株式投資家が金利高を軽んじており、株式相場に関しては過剰に楽観していますが、そんな状態はもう間もなく解消されるでしょう。

7816(8/13 高値)を以て、25年4月安値(4835)以来の一連の5波動構成は、すべて完了したとみられます。この見方通りなら、今後の下落リスクは—おそらく一般に思われている以上に—高いでしょう。

9月22日には一時7782まで上昇し、8/13～9/16の下げ幅の88.8%(≒89%、89はフィボナッチ数)を戻しました。8月高値に次ぐ二番天井を付けたとみられます。

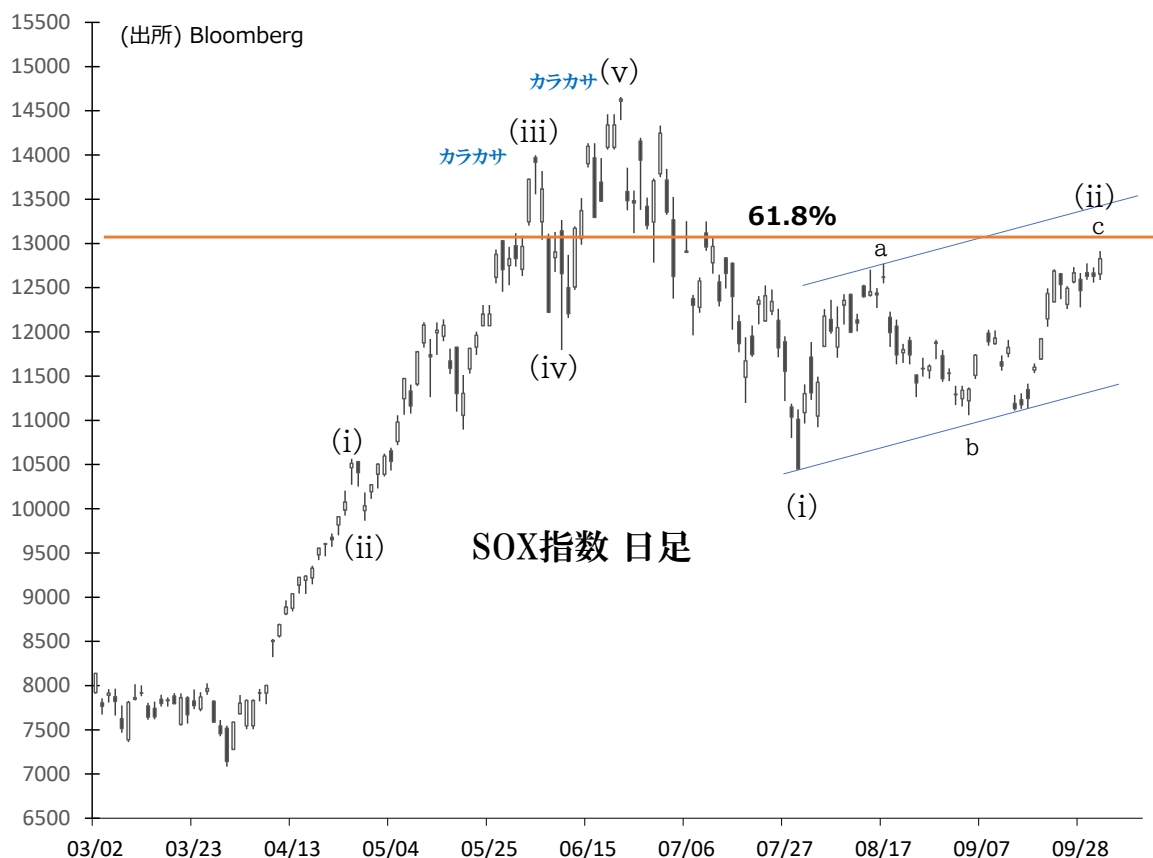
7507(9/16 安値)を下回るとダブル・トップが確認され、その後は下げ基調が強まるでしょう。次はレツサーディグリー第4波安値の7313(7/29 安値)への下押しの動きが想定されます。

SOX 指数

7月29日安値(10,445)からの上昇は、第(ii)波リバウンドとみられます。

足元では3カ月ぶり水準に上昇してきましたが、それと共に第(i)波(6/22~7/29)の下げに対する61.8%戻りレジスタンスに接近しています。

第(ii)波は終わりつつあるとみられます。そうであれば、第(iii)波の下落トレンドが近々スタートするでしょう。第(iii)波の下落スケールは、第(i)波(28.7%下げ)を遥かに凌駕するものになるでしょう。

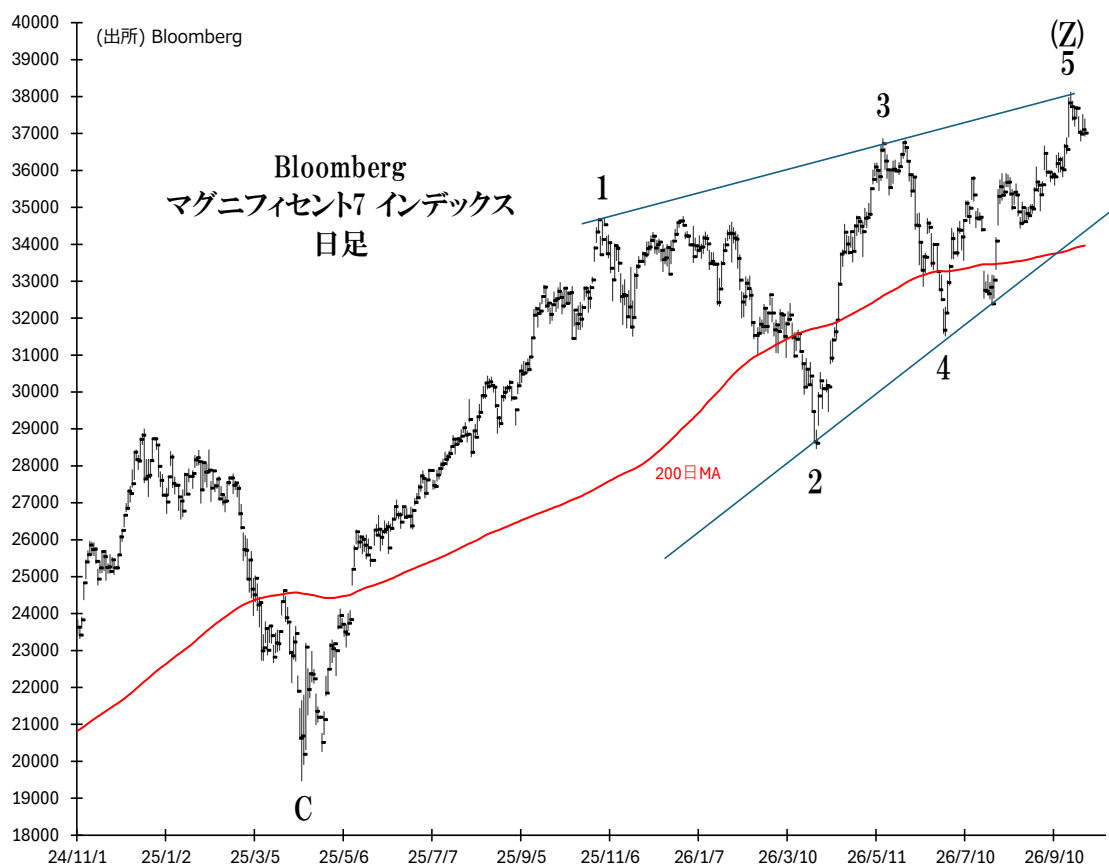


Bloomberg マグニフィセント7 インデックス

ナスダック、ナスダック100と同じ秋分(9月22日)に、マグ7も最高値を付けました。

もっとも、高値更新は強気見通しへの変更を意味しません。

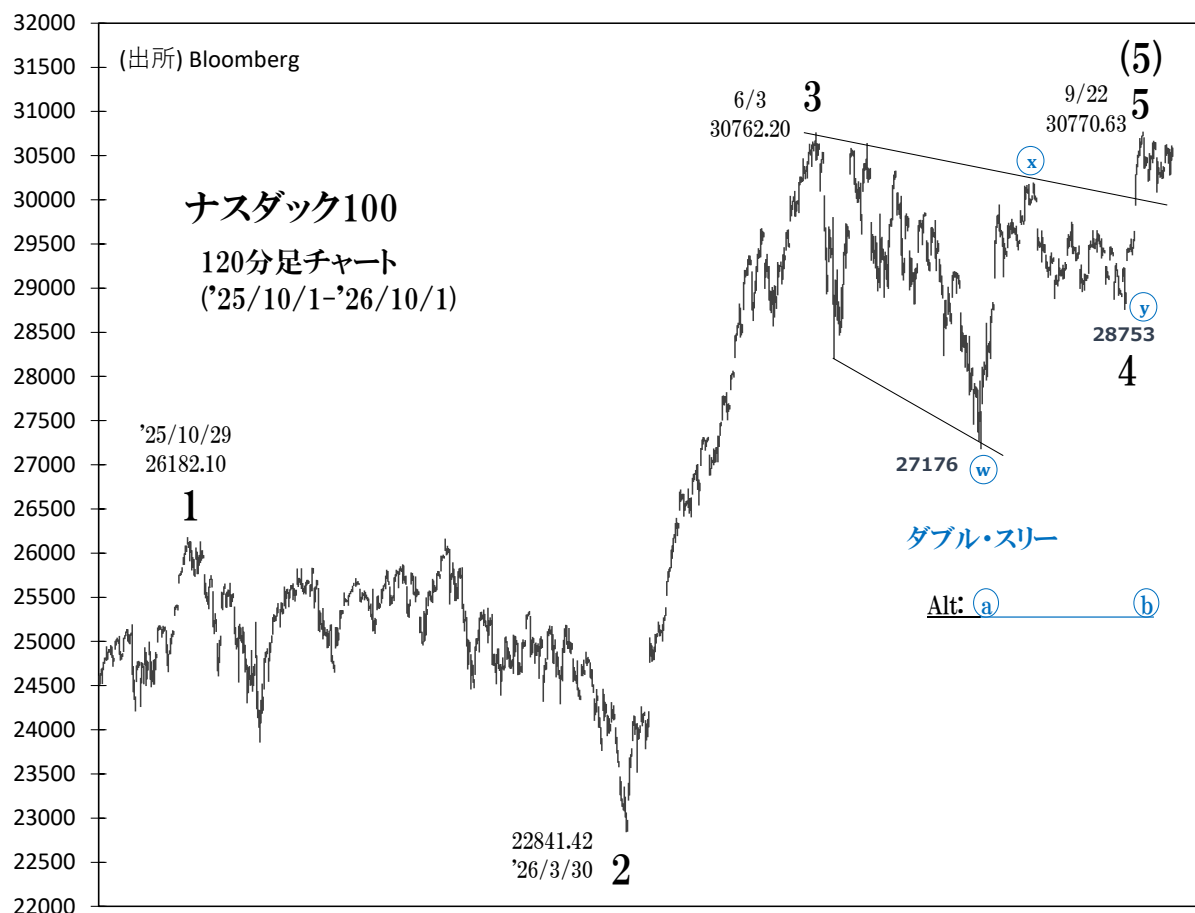
25年4月安値からの上昇は「ウェッジ」天井パターンです。9月の高値はパターン上限に達し、その後は反落に転じています。マグ7は天井を付けた可能性があります。



[ダウ輸送株平均]



ナスダック 100



【ナスダック 100 時間足 エリオット波動分析】

25 年 4 月安値(16,542)から展開している上昇波は、インターミディエイト第(5)波に位置付けられ、そのうち 6 月高値からのマイナー第 4 波は、28,753(9/16 安値)で完了したと思われます。

マイナー第 2 波の「ダブル・ジグザグ」に対し、マイナー 4 波は「ダブル・スリー」を形成しました。

28,753 からの上昇はマイナー 5 波であり、その完成を以てインターミディエイト(5)波も完成します。

29,647 まで下げると 9 月 18 日-21 日のマドを埋めますが、それはナスダック 100 天井打ちの合図です。

(オルタナティブカウント、Alt)

マイナー第 4 波は「フラット」であり、27,176(7/29 安値)からの上昇はマル b 波に相当します。

次のマル c 波による下落は 2 万 7000 処で底入れし、それを以て第 4 波は完成します。

その後、第 5 波による上昇が続くことになります。

米ドル/円



【月足・エリオット波動分析】

日米実質金利差から導かれる米ドル/円の水準は、現在 1ドル=148 円程度です。

さらに、購買力平価からの妥当な円相場は OECD 算出の GDP ベースで 1ドル=97 円～103 円です。

短期的にも長期的にも、日本円の過小評価が続いています。

163.944 円(7/23)を以て通算 5 年間の円安⑤波[ウェッジ]は完了した、とみられます。ウェッジ内の副次波は、次のように相互に美しい比率を示しています。

(C)波の長さ÷(A)波の長さ=0.703、(E)波の長さ÷(C)波の長さ=0.703

この先は数年間にわたる円高になるでしょう。上記のように、長らく日本円はその実力に比べ過小評価されてきましたが、今後は実力に見合った適正な水準が模索されていくと思われます。

7 月末の日米協調円買い介入は、円安の限界水準(160 円台前半)を明示しており、もはや積極的な円売りの動機は失われたといえます。今後は次第に円高傾向が強まっていくでしょう。

筆者は今後数年内(2028 年?)に、1ドル=120 円-125 円を付けてもおかしくない、とみています。それは歴史的なレンジ[80 円-160 円]の中値に相当し、かつて「黒田シーリング」と言われた水準でもあります。



【日足 エリオット波動分析】

155.156 円(8/3)からの第 2 波「ランニング・フラット(マル a-マル b-マル c)」は、158.989 円(9/25)で完了した可能性があります。

そうであれば、強いドル安・円高波動(第 3 波)が近々到来すると想定されます。

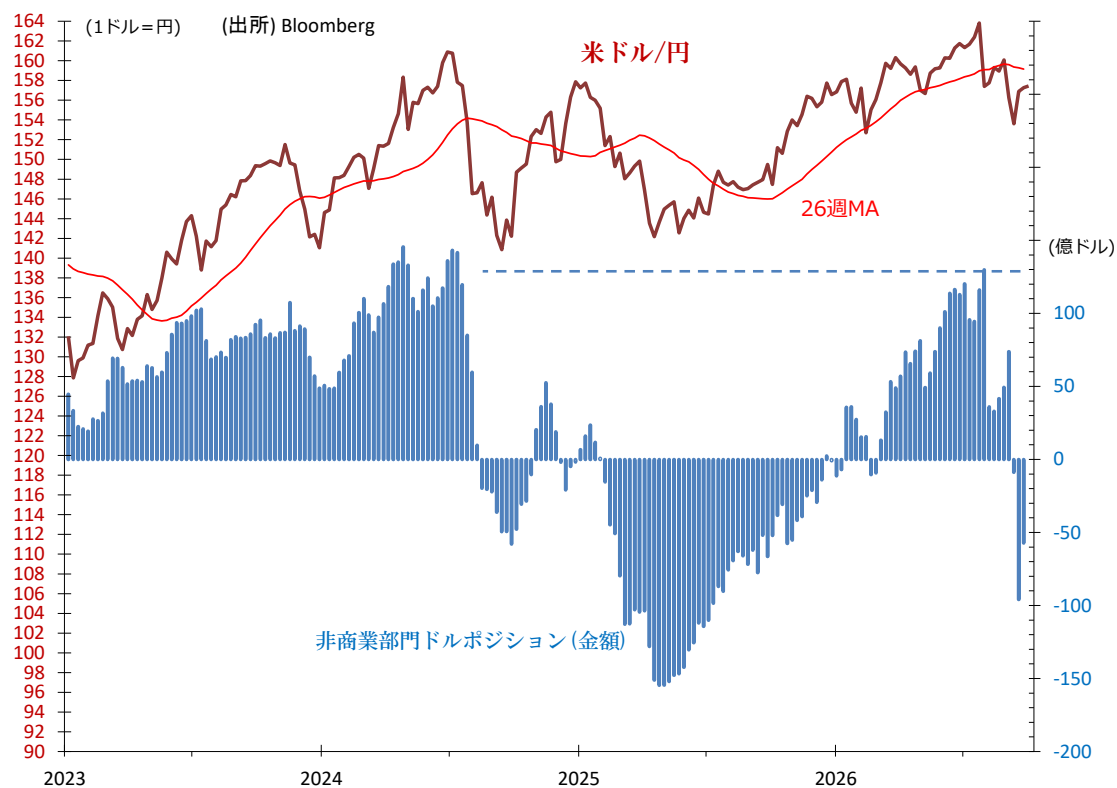
第 3 波は 152.854 円を早々に下回り、152 円処を試すでしょう。152 円処は、25 年 4 月(139.577 円)からのドル/円上昇の半値戻り[151.910 円]に相当する上、今年 1 月 27 日の安値 151.994 円でもあります。また、7 月高値からの計算値[151.557 円]にも近いものです。

心理的節目の 150 円も視野に入り、その直下には 61.8%戻り水準[149.070 円]が控えています。

なお 155 円処のネックラインに次いで、新たなネックライン(152 円処)が形成され、ヘッド・アンド・ショルダースは「複合型」になっています。この複合パターンに基づくターゲットは、①145 円-146 円、②141 円であり、これらターゲットが、10 月末にかけて達成される可能性に注目しています。

金利差からのドル/円推計値

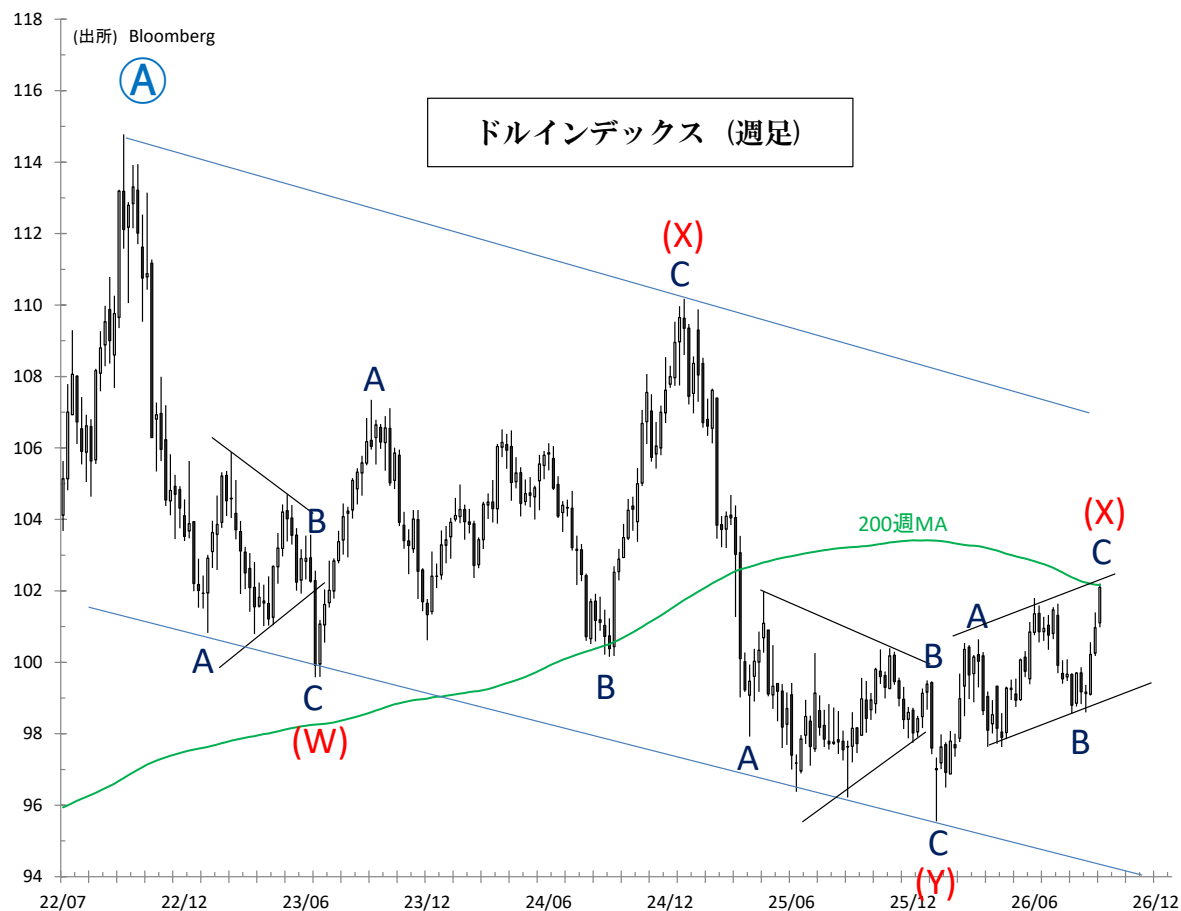
足元、日米実質金利差からのドル/円推計値は[147.491 円]です。



円買い越しが縮小 (2026 年 9 月 22 日時点)

IMM 通貨先物市場で、投機筋(非商業部門)の円買い持ち高は、前週の 95.90 億ドルから 57.20 億ドルに縮小しました。

ドルインデックス (ドル指数)



【エリオット波動分析】

10月1日には一時102.207まで上昇、6カ月ぶりドル高となりました。前回高値の101.800(6/24)を上回っており、短期的な波動カウントを見直します。

今年1月からのドル高(X)波はA-B-C編成ですが、そのうちB波が98.557(8/21)で完成し、以降のドル高はC波に位置付けられます。

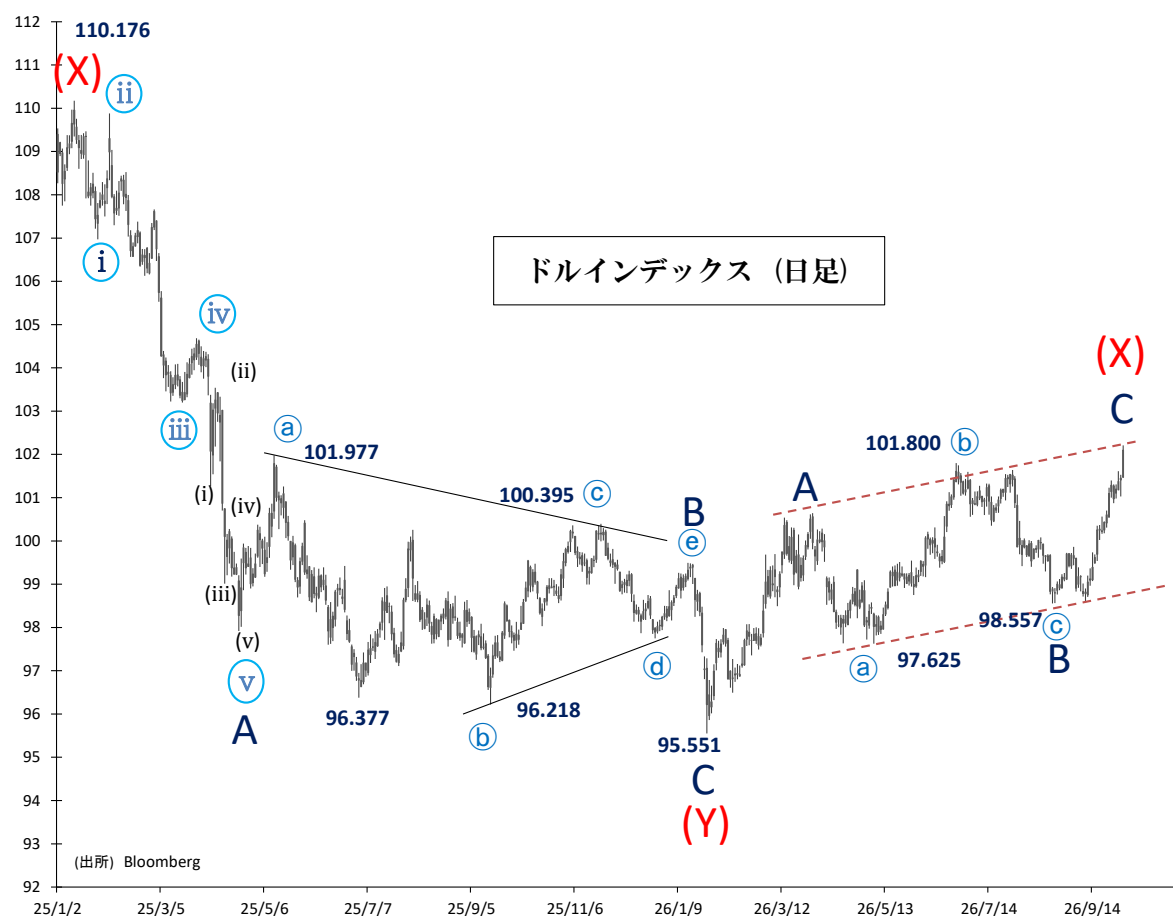
今週は200週MAに届いており、C波は終わってもおかしくありません。

そうすると1月からの(X)波も完成し、ドル安トレンドが近々再開すると思われます。

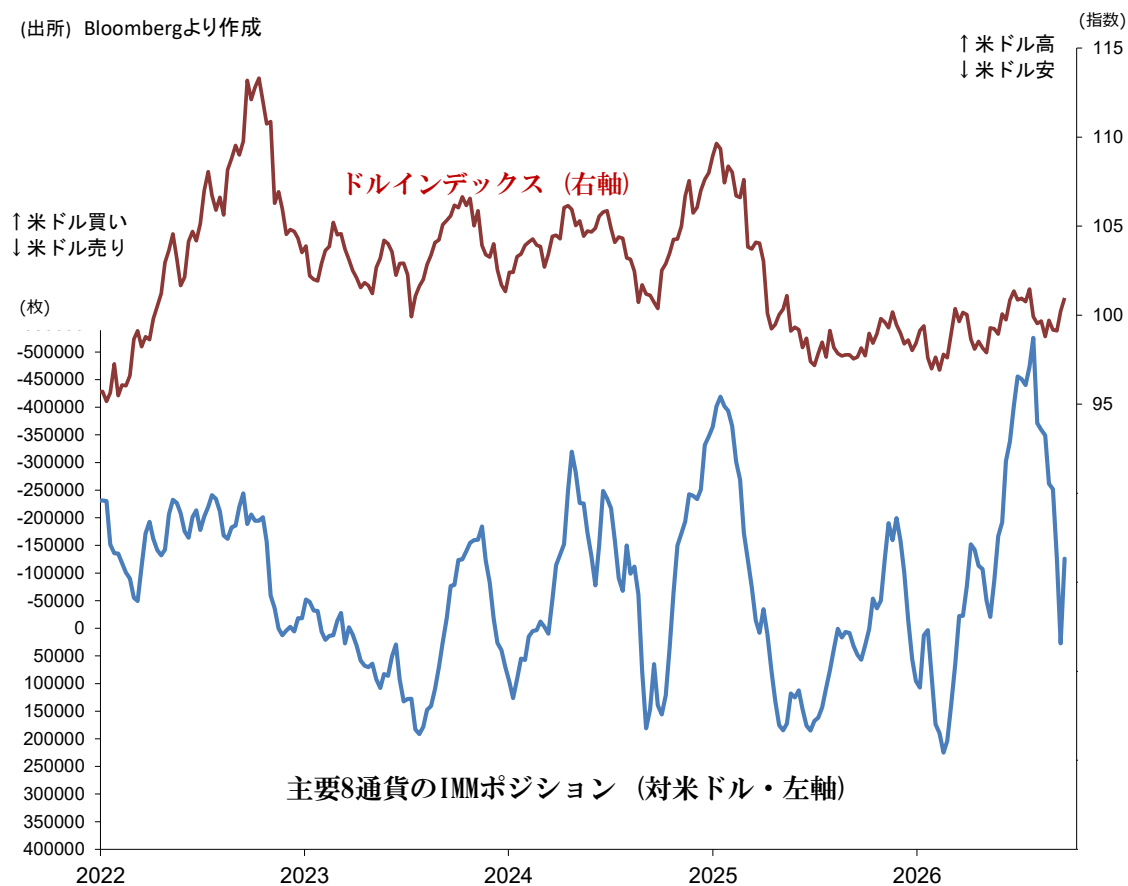
一方でドル高基調が続く場合は、(Y)波(25年1月～26年1月)の半値戻り[102.864]、さらに[103.654](A波とC波が等しく上がる水準)への上昇余地があります。

投機筋のドル合成ポジションが買い持ちに(2026年9月22日時点)

投機筋によるドル合成ポジションは、前週2万7480枚のドル売り持ちから、12万5909枚のドル買い持ちに転じました。買い持ちとなるのは2週ぶりです。



(出所) Bloombergより作成



※当レポートは、情報提供を目的としたものであり、特定の商品の推奨あるいは特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。

※当レポートに記載する相場見通しや売買戦略は、ファンダメンタル分析やテクニカル分析などを用いた執筆者個人の判断に基づくものであり、予告なく変更になる場合があります。また、相場の行方を保証するものではありません。お取引はご自身で判断いただきますようお願いいたします。

※当レポートのデータ情報等は信頼できると思われる各種情報源から入手したものです。当社はその正確性・安全性等を保証するものではありません。

※相場の状況により、当社のレートとレポート内のレートが異なる場合があります。

当社サービスに関する注意事項

・取引開始にあたっては契約締結前書面をよくお読みになり、リスク・取引等の内容をご理解いただいた上で、ご自身の判断にてお願いいたします。

・当社の店頭外国為替証拠金取引および店頭 CFD 取引は、元本および収益が保証されているものではありません。また、取引総代金に比較して少額の資金で取引を行うため、取引の対象となる金融商品の価格変動により、多額の利益となることもありますが、お客様が差し入れた証拠金を上回る損失が生じるおそれもあります。また、各金融市場の閉鎖等、不可抗力と認められる事由により店頭外国為替証拠金取引および店頭 CFD 取引が不能となるおそれがあります。

・店頭外国為替証拠金取引、店頭 CFD 取引における取引手数料は無料です。

・当社が提示するレートには、買値と売値に差（スプレッド）があります。流動性が低くなる場合や、天変地異または戦争等による相場の急激な変動が生じた場合、スプレッドが広がる場合があります。

・店頭外国為替証拠金取引に必要な証拠金額は、個人のお客様の場合、取引総代金の 4%以上です。法人のお客様の場合、取引総代金に、金融先物取引業協会が算出した通貨ペアごとの証拠金率（為替リスク想定比率）を基に当社が算出した証拠金率を乗じた金額となります。為替リスク想定比率は、金融商品取引業等に関する内閣府令第 117 条第 27 項第 1 号に規定される定量的計算モデルを用い算出します。なお、証拠金率（為替リスク想定比率）は変動いたします。店頭 CFD 取引に必要な証拠金額は、取引総代金の 10%です。

金融商品取引業 関東財務局長（金商）第 2797 号

【加入協会】日本証券業協会 一般社団法人 金融先物取引業協会
株式会社マネースクエア
